小分子化学物質によるアトピー性皮膚炎の発症と 予防についての基礎研究

岐阜薬科大学 薬理学

永井博弌

The purpose of the present study is to investigate whether or not simple chemicals are able to introduce atopic dermatitis like symptoms in mice. An another purpose of the present study is to investigate the pharmacological and immunological prevention of such symptoms. For the first purpose, we tried to make a good model for atopic dermatitis in mice by using dinitrophenylbenzene (DNFB) on the ear skin. Consequently, we have established two different kinds of models for atopic dermatitis in mice.

In the first model, mice were passively sensitized by an intravenous injection of monoclonal anti-dinitrophenol (DNP) IgE, and their ears challenged epicutaneously with dinitrofluorobenzene (DNFB) 24 h later. The cutaneous reaction estimated by ear thickness reached a peak 1 and 24 h after the antigen challenge. Histopathological studies indicate that eczemous skin lesion (24 h) in mice is similar to that in human atopic dermatitis. Prednisolone at doses of 3 to 10 mg/kg clearly inhibited the IgE-mediated cutaneous reaction.

In the second model, DNFB was painted on the mice ear five times. The thickness due to dermatitis reached a maximum 24 hr after the second, third and fourth paintings. The strong expressions of INF- γ and IL-2 but not IL-4 and IL-5 mRNAs in reverse transcription-polymerase chain reaction (RT-PCR) in the skin lesions indicated the participation of Th1 cells in the ear delayed type hypersensitivity reaction. Simultaneously, hapten specific IgE (sIgE) was detected in serum from the immunized mice. These results indicate that five topical applications of DNFB to the mouse ear produces eczematous dermatitis in the ear and hapten sIgE in the serum. This model shows typical atopic dermatitis symptoms in the skin and IgE production. Regarding second project, the effect of anti-IL-4 monoclonal antibody on this hapten-induced contact dermatitis and IgE antibody production are studying now. The results will be reported in near feature.

1 目 的

近年の化学工業の発展に伴いアレルギー疾患の 患者が増加している。この主な原因は生活環境の 変化と同時に精神衛生面の環境変化が挙げられて いる。アレルギー疾患発症の大きな要因は遺伝的 要素と環境因子であることは多くの研究者によっ て指摘されている。本研究の目的は化粧品などに 含まれる小分子化学物質によるアトピー様皮膚炎 の発症機序と予防法について動物モデルを用いて 検討することである。近年、アトピー性皮膚炎の 患者数は増加の一途を辿っている。特に、成人の 患者数が増加し、社会問題にもなっている。これ まで、教室では種々のアレルギー疾患の発症機序



Basic studies on the onset and prevention of atopic dermatitis with simple chemicals

Hiroichi Nagai

Department of Pharmacology, Gifu Pharmaceutical University とそれらの予防法について検討を行なってきた。 アトピー性皮膚炎はその中でも最も重要な課題の 一つである。これまで、アレルゲンとしてはダニ 抗原に代表される室内アレルゲン、食物および化 粧品に含まれる小分子化合物などが知られている が、近年、我々は小分子化合物によるアトピー性 皮膚炎様症状を発症するマウスモデルの作成に成 功したのでそれらを用い、小分子化合物による皮 膚炎の発症機序の解明を行ない、さらに予防法に ついての検討を行った。

2 実 験

2.1 実験材料

実験動物は体重 $16 \sim 21 g \circ 9 \sim 10$ 週令雌性 BALB/c 系マウスを、日本 SLC より購入して使 用した。マウスは温度 $22 \pm 1 C$ 、湿度 $60 \pm 5 \%$ の恒温恒湿飼育室にて、自由給水下に固形飼料 (ラボ MR ストック、日本農産)を用いて飼育し た。抗原として 2,4-dinitrofluorobenzene (DNFB, Nacalai Tesque)を用いた。DNFB は、acetone (Nacalai Tesque): olive oil (東海製薬) = 3:1 (v/v) 溶液に 0.15% となるように溶解した。抗体 は Monoclonal mouse anti - DNP IgE 抗体 (MMCE) を用いた。MMCE は、DNP 化ブタ回虫抽出物 で免疫した Balb/c 系マウス脾細胞から樹立した マウス IgE 抗体産生細胞株 (EC1) を培養して作 製し上清を回収して MMCE とした。MMCE は - 80°Cで凍結保存し、実験には培養上清をその まま使用した。MMCE 中の力価は、ラット 48hr heterologous passive cutaneous anaphylaxis を用 い1:512-1024 であった。また、enzyme linked immunosorbent assay によって測定した IgE の濃 度は、2914.52 ng/mL であった。

2.2 実験方法

IgE 依存性二相性皮膚反応は Sakurai ら¹⁾の方 法に従い惹起した。すなわち、雌性 Balb/c 系マ ウスに MMCE 1 mL を静脈内注射して受動的に 感作し、24 時間後に 25mL の DNFB をマウス両 耳殻の表裏に塗布して反応を惹起した。反応惹 起後、種々の時間にダイヤルシックネスゲ – ジ (Peacock;尾崎製作所、東京)を用いて両耳殻の 厚さを測定した。成績は、反応惹起直前と反応惹 起後の耳殻の厚さの差で示した。

抗原反復塗布の実験はマウスの両耳介の表裏に 0.15% DNFBを25mL宛、1週間に1回の割合で 5回塗布して反応を惹起した。

2.3 統計学的解析

成績は平均値 ± 標準誤差で示した。有意差検定 は、Dunnet multiple range test あるいは Student's t-test および Aspin-Welch によって行った。

3 成績および考察

これまでにマウスを用いた二種類の in vivo モ デルの作成にほぼ成功した。in vivo モデルでは dinitrofluorobenzene (DNFB)を抗原としてそれに 対応するモノクロナール IgE 抗体を用いて生じる 遅発型皮膚炎、および前述の DNFBを抗原として 皮膚に反復塗布すると当初、遅延型接触性皮膚炎 の症状を示したのち、やがて血清 IgE 値の上昇を 伴う皮膚炎が発症し、その組織像、サイトカイン 発現パターンおよび治療薬の薬効から両モデルと もアトピー性皮膚炎の類似モデルであると考えら れた。

これらのモデルを用いて発症に関与する炎症細 胞および組織細胞の役割をサイトカイン、リピッ ドメディエーターを中心に検討し、それぞれの発 症における役割を明らかにした。

1) DNFBによる二相性皮膚反応

図1に各系統のマウスにおける二相性皮膚反 応の成績を示す。ddY、ICR および Balb/c 系マ ウスでは反応後1及び24時間にピークを示す二 相性の反応がみられる。肥満細胞欠損マウスであ る WBB6F1-W/Wv マウスでは即時相の反応はみ られないが、遅発相の反応がみられた。また、T cell 欠損マウスの Balb/c-nu/nu マウスでは Balb/ c+/+ 正常マウスと変わらない二相性皮膚反応が みられた。更に、本二相性皮膚反応はIL-1およ び TNF に対するモノクローナル抗体により抑制 されるが、IL-5に対する抗体によっては影響さ れなかった(図2)。しかし、抗炎症薬のプレドニ ゾロンは用量依存的に本反応を抑制した(図3)。 図4にその際の組織写真を示す(図4)。すなわち、 抗原である DNFB の塗布により正常部位 (A) に比 べ、好中球を中心とする多くの炎症性細胞の浸潤 がみられ、表皮の肥厚が観察される(B)。さらに、 血管の著明な拡張がみられた。これに対し、プレ ドニゾロン投与群では炎症性細胞の浸潤や表皮の 肥厚は少なく、組織学的にも明らかに炎症反応は 抑制された。これらのことから、本モデルは低分 子化合物とそれに対応する抗体により生じるアレ ルギー性皮膚炎であり、低分子化合物による皮膚 炎症の発症と予防の研究に有用であるものと思わ れた。

2) DNFB 反復塗布によるアレルギー性皮膚炎

DNFBを一週に一回、マウスの耳殻に塗布する と接触性皮膚炎による炎症反応が観察される(図 5)。またこの時血清中には DNP に対する特異的



4.0 3.0 2.0 1.0

WBB6F1-W/W



BALB/c-nu/nu



4.0 3.0 2.0 1.0 0.0 -1.0 0.0 1.0 0.1 1.0 0.1 1.0 0.1 1.0 0.1 1.0 0.1 1.0 1.0 0.1 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.01.0

Fig.1 IgE-mediated cutaneous reaction in ddY, ICR, BALB/c, BALB/c-nu/nu and WBB6F₁-W/W^Vmice. Mice received an intrevenous injection of 1.0mL of anti-DNP IgE antibody 24hr before skin testing with 0.15% DNFB. Each value represents the mean \pm SEM of 5-26mice. *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001.



Fig.2 Effects of anti-IL-1 β , anti-TNF- α and anti-IL-5 on IgE-mediated cutaneous reaction in BALB/c mice. Anti-IL-1 β and anti-IL-5 were given intradermally and anti-TNF- α was intrevenously 10min before antigen challenge.Each value represents the mean \pm SEM of 5-8 mice. *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001



Fig.3 Effect of prednisolone on IgEmediated cutaneous reaction in BALB/c mice. prednisolone was administered intraperitoncally 2hr before antigen challenge. Each value represents the mean ±SEM of 8mice.





Fig.4 Effect of prednisolone on the IgE antibody mediated allergic cutaneous in mice. [A] Normal, [B] control, [C] prednisolone



Fig.5 Ear swelling caused repeated painting of DNFB in mice. Ears of mice received atopical application of 0.15% DNFB in acetone and olive oil or vehicle once a week for 5 times. Each point indicateds the mean ± SEM of 8mice. hr: Time after each painting(houes)

IgE 抗体が証明された (Table 1)。このことはこ れまで、単純なハプテンでは接触によっては接触 性皮膚炎のみの発症であると考えられたことが、 明らかに、免疫グロブリンの産生を伴う反応が発 症できることを示しており、ヒトのアトピー性皮 膚炎を考える上で重要な発見であった。また、こ の時の耳介局所およびリンパ節でのサイトカイン の mRNA 発現を RT - PCR 法で測定すると耳介局 所では IFN - y および IL - 2の mRNA の発現がみ られ、Th 1 細胞の関与が示唆された (図6)。こ の時、Th 2 サイトカインである IL - 4 および IL -5 は耳介では証明されず、頚部リンパ節において

Antibody titer	sIgE(EU/ml)	tIgE(EU/ml)	tIgG(µg/ml)	tIgM(µg/ml)
0 week (n=7)	0	365±76	117±25	563±78
5th painting of Vehicle (n=18)	0	173± 43	1 456±6 1	745±70
5th painting of DNFB (n=19)	163±25	4909±433	1235±48	571±42

Table 3 Effect of repeated of DNFB on the serum immunogloblin levels

Mice ears were painted with the vehicle or 0.15% of DNFB once a week for 5 weeks. The titer of hapten specific IgE(sIgE), total IgE(tIgE), total IgG(tIgG) and total IgM(tIgM) in mouse serum was measured at 0 week and 4hr after the fifth painting of the vehicle or DNFB on the ear. sIgE and tIgE readings are given in ELISA units(EU)/ml compared with laboratory generated DNP-sIgE and tIgE standards. tIgG and tIgM readings given in μ g per ml compared with respective commercial standards. The values represent the arithmetic mean ±SEM of indicated number of mice.



Fig.6 Expression of cytokine mRNA in the ears and cervical lymph nodes of mice treated with DNFB. Ears of mice received a topical application of 0.15% DNFB in acetone and olive oil or vehicle once a week for 5 times. The expression of IFN- γ, IL-2, IL-4, IL-5 and β-actin mRNAs were examined using RT-PCR.

その発現あるいは発現増強がみられた。更にこの ことはリンパ節での IgE 産生を示唆する germline $C\varepsilon$ および productive $C\varepsilon$ の mRNA が証明された ことからも確かめられた。以上のような多くの基 礎検討から本反応の発症は図7に示すような機序 が想定された。

すなわち、小分子化合物によるアレルギー性皮 膚炎の報告は大半が接触性皮膚炎についてであ

Characteristics of the model

Repeated antigen application-induced ear swelling and IgE production



Fig.7 DNFB 塗布によるアレルギー性皮膚炎モデルの発症機序

る。抗原を経皮的に塗布することによる感作では、 これまでほとんど皮膚での単核球の浸潤を主体に した組織学的判定により検討してきた。また、最 近免疫学の進歩により、T 細胞のうち helper T 細 胞は、その機能の違いから Th 1 細胞と Th 2 細 胞に分類されることが明らかになった。接触性皮 膚炎の発症は Th 1 細胞が反応性細胞であること も次第に明らかにされてきた。さらに、Th 2細 胞は液性抗体産生に必要な細胞としてとらえられ ている。しかし、小分子化合物による免疫反応に ついての解析はほとんど行なわれていない。今回 の我々のモデルは小分子化合物を皮膚に反復塗布 すると皮膚では接触性皮膚炎に類似の症状を呈し ながら Th 1 細胞活性化が起き、次第に全身のリ ンパ系組織で Th 2 細胞が活性化されて免疫グロ ブリン、特に IgE 抗体の産生が始まることを明ら かにしたものである。従って、多くの点でヒトの アトピー性皮膚炎と類似しており、小分子化合物 によるアトピー性皮膚炎モデルとして有用である ものと思われる。

以上、本研究ではこれまであまり解析されなか

った小分子化合物によるアトピ ー性皮膚炎様症状の発症につい ての研究に有用なモデル系を確 立でき、今後、系統的にその発 症機序と予防についての免疫 薬理学的な検討を行う予定であ る。

参考文献

1) Sakurai T, Inagaki N and Nagai H ; The effect of anti-

tumor necrosis factor (TNF)-a monoclonal antibody on aller gic cutaneous late phase reac tion in mice. Life Science, 54, PL291-295, 1994

2) Nagai H, Sakurai T, Inagaki N et al.; An

immunopharmacological study of biphasic allergic skin reaction in mice, Biol Pharm Bull 18, 239-245, 1995

- 3) Nagai H, Sakurai T, Abe T et al.; TNF-a participates in an IgE-mediated cutaneous reaction in mast cell deficient, WBB6F1-W/Wv mice. Inflamm Res 45, 136-140, 1996
- 4) Inagaki N, Tsunematu M, Sakurai T et al.; Effect of prednisolone on IgE dependent biphasic cutaneous reaction in Balb/c mice. Gen. Pharmac. 28, 93-97, 1997
- 5) Nagai H, Matsuo A, Hiyama H et al.; Immunogloblin E production in mice by means of contact sensitization with a simple chemical hapten, J. Allergy Clin. Immunol., in press, 1997
- 6) Nagai H, Hiyama H, Matsuo A et al.; FK-506 and cyclosporin A potentiate the IgE antibody production by contact sensitization with hapten in mice J. Pharmacol. Exper. Ther. 283, 321-327 (1997)